

---

# 灰色の空

珍古

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の空

### 【Nコード】

N3753F

### 【作者名】

珍古

### 【あらすじ】

主人公（菅野）は平凡なサラリーマンである。世界恐慌から平凡な日々を守るのか！？

## プロローグ

### プロローグ

よく言われる言葉に、一寸先は闇という言葉がある。

誰だって、明日のことはわからない。とんでもない不幸が両手を広げて待っているかも知れないし、信じられないような幸せが訪れるかもしれない。ただ、ほとんどの場合、明日も今日と同じような日が続いてくることを、人は知っている。ありふれた日常に麻痺しているのだ。僕もそうだった。今日、リストラされるまでは。

2008年11月

美樹「菅野さん、人事の高橋部長が呼んでましたよ」美樹は職場の後輩でスレンダーな体に似合わず、あどけない顔をした、俗に言う、美人さんだ。

「はい、ありがとうございます」間抜けな声で答えた。その先に待っている不幸など、考えてもいなかった。

部長「菅野君、調子はどうかね？」部長はいつもと変わらない、穏やかな口調で言った。

「やはり、サブプライム、リーマンショック、追い討ちをかける円高ドル安のせいで、うちのようないメーカーは大変です。特に、私のように営業にいますと、かなり実感させられますね。」

実際、営業にいる僕にとって、数字が全てだ。僕自身の成績は、同期の中ではまあまあだ。僕は二流大学をまあまあで卒業した後、この、アパレル業界では大手のYUMIKO TAKAGIに入社した。仕事は華やかで楽しかった。この仕事が、劣等感の強かった僕にプライドとアイデンティティを与えてくれた。僕はこの

仕事が好きなのだ。

部長「そうか……。今日は君にいい話と悪い話がある。どちらから聞きたいか？」部長はいつもこんな感じで、映画の台詞みたいな言い方を恥ずかしげもなく言う。

「良い話からお願ひします。」僕は知っている。こうゆう時、本当は悪い話の本題であつて、良い話はないがいつでも良いのだ。

部長「では、良い話だ。うちの娘がついに英検3級に受かったんだ。すごいだろう？」本当にどうでも良い話だ。

「おめでとうございます……。」

部長「では、本題に入ろうか。君もよく知っているようだが、現在とても不況だ。消費者の意識は我々の作るような高価なモノを買う時代からユクロみたいな安価でシンプルなモノを求めている時代に変わったんだ。そして、今、わが社は好景気のアジア、ロシアにターゲツトをソフトさせる動きになつてきた。君の同期の坂本君もBRICKSをマーケットとしたプロジェクトに参加してもらつてゐる。彼は中国語が堪能だからね。」部長は一体何を言いたいんだらうか？だんだん僕は嫌な予感がしてきた。

部長「君もせめて英語だけでも出来たら上にアピールできるんだが……。」

「部長、一体僕は今日何のために呼ばれたんですか……？」もう話が見えてきた……。なんてことだろう。自分は子供の頃に両親が離婚し母方の祖母に引き取られた。その祖母も去年亡くなり、ほぼ、天涯孤独の身であつた。自分独りの為だけに働いてきた。その為、貯蓄もあまりしてない……。そんな考えが一瞬の間に走馬灯のように頭の中を駆け巡つて行つた。

部長「本当に残念だが、再就職を考えてみてもらえないか？私も君のような真面目な社員を失うのは辛い。出来る限りのサポートはしていきたいと考えている。」部長は採用試験の頃から僕のことを気にかけてくれていた。採用試験でも、入ってから営業に移りたいと申し出たときも、いつも力になってくれていた。そんな彼が自分

の意思で僕をクビにするはずがなかった。きっと上層部で一斉解雇の話が出たときにはすでに僕はクビになることは決まっていたんだろう。僕は彼のことを恨むことは無かった。

「解りました、今まで本当にありがとうございました。部長にかわいがって頂いたご恩は忘れません。」

部長「すまない・・・。」

デスクに戻った僕はもう仕事どころではなかった。もう、今やりかけの仕事を片付ける気も、今後何をするか考えることも出来なかった。僕は蛍光灯の明かりをボーっと見つめていた。

美樹「魂抜けちゃったみたいな顔してどうしたんですか？」

「ああ、ちよつとね・・・。」もう泣きそうだった。いや、泣いていたかもしれない。誰かに話して少しでも楽になりたかった。

「なあ、美樹、今日飲みに行かない？」僕は捨てられた子犬のような目で見つめた。

美樹「いきなり言われてもなあ・・・。また今度誘ってください」  
彼女はすまなそうに言った。

・・・

女社長はオフィスの窓から、灰色の空を見上げながら憂鬱になっていた。自身の会社の経営状態は過去に類を見ない不況のせいですつ潰れてもおかしくない状態であった。だが、ワンマン経営だった YUMIKO TAKAGI の経営状態の実態を知るものはごく一部の役員だけであった。

女社長は空の色と自分の爪の色を見比べながら自身の人生を振り返っていた。旦那を捨て、幼い子供を捨て、仕事のみ生きてきた女は、ついに全てを失う日が目前に迫っていることにはあまり恐怖は無かった。ただ無念なのは・・・。ドアをノックする音がした。

部長「人事の高橋です。失礼します。」

「あの子はどう？やっぱり落ち込んだ？」

部長「ええ、でも誰よりも彼を可愛がっていた私からの宣告だったので、きつと解ってくれています。」

「そう・・・。ありがとう。他にあの子にしてあげられることがもしあったら、そのときはお願い。」

部長「はい・・・。きつと彼も暫らくたてば、この半ば強引なりストラも愛情あつてのことだと気づくでしょう。もう少し遅れると退職金も満足に出せなくなる可能性が出てきます。」

「高橋、色々ありがとう。あなたもこの泥舟から降りてもいいわよ？」

部長「大丈夫ですよ。わたしはあなたを最期の瞬間までお守りします。独りにはしませんから。」高橋は女社長の髪をそつと撫でるし、接吻をした。

・・・

1982年

高木由美子は悩んでいた。2歳になる息子をあやしながら趣味でデザインしたドレスを、興味本位で公募したところ思わぬ評価を受け、大手婦人服ブランドからスカウトされていた。

夢を追ってアパレル系の企業に就職したが理想と現実はかけ離れていた。クリエイティブな仕事はそこには無かった。由美子は早々

と結婚し妊娠がわかり次第すぐに退職した。家庭に入ることに疑問は無かった。しかし、心の片隅にあった未練が由美子を動かしてしまった。

「母さんごめんね。」

母親「ほんとに最低な母親だよ。もうこの子の前に現れるんじゃないよ！」

由美子は子供を母親に押し付け、旦那と別れ、デザイナーの人生を歩んだ。留学し海外でも評価されるようになり帰国後、独立した。YUMIKO TAKAGIの設立である。バブルの後押しもあり服は飛ぶように売れた。事業を拡大しバブル崩壊後もなんとか生き残った。

## 悶絶酒場

### ゲンのバー

会社をクビになり、女を飲みに誘ったが断られ、とてもだが独りではられない状態だった僕は、大学時代の同級生がマスターをやっているバー“Gの酒場”にフラフラの足取りで行った。

マスターの名前はゲン。身長は190cmを超える大男だ。大学時代にバイトしていたバーを卒業後に居抜きし、そのまま経営者兼マスターという仕事をしている。大きな体に似合わず、心の優しい男で、その人柄がウケて、店はなかなか繁盛している。今では、大学時代から付き合っていた彼女の英子と結婚し二人で店を切り盛りしている。

ゲン「大丈夫だつて、転職なんてこのご時世当たり前だつて。それより俺を見習つて、起業しろよ！お前も若いんだ。まだ無限の可能性があるんだよ。」

この男と話していると、自然と不安が和らいでくる。大学4年のとき、就活をしていなかったゲン。みんなは、あいつ大丈夫なのか？みたいなことを言っていたが、今は皆、ゲンに会社の愚痴やら恋愛相談やら悩みを聞いてもらっている。僕は、おとなしく就職し無難に働いているが、それが、誰の為になつて、本当に社会から必要とされているのか、わからないでいた。

しかしゲンは確実にみんなに必要なとされている。僕はすこしゲンが羨ましくなつた。

「俺はゲンみたいにセンスとか良くないから起業には向かないよな。バイトしながら仕事探すかな。でもとりあえずまとまった金は欲しいよな……。」

英子「治験は？あの新しい薬飲むやつ。結構もらえるみたいよ？」  
「おいおい、大丈夫なの、それ？」仕事どころか体がおかしくな

ってしまったって元も子もない。

英子「なんか、入院食の試食みたいな軽いやつから、やばそうなやつまで色々あるみたいよ。友達もやったっていつてたけど、全然大丈夫みたい。」

「そつか……。ちよつと考えとく。」

・・・

僕はその夜、英子の話していた、治験のことが気になっていた。

確かに、怪しげなバイトだが、とんでもない副作用があれば、ニユースになったりしているはずだし、動物実験では、なんともないのだから、素人考えでは大丈夫な気がする。

「とりあえず、ネットで調べてみるか……。」「ネットには沢山の治験の募集があつた。」

『あなたも、社会貢献してみませんか？』

募集・・・禁煙一週間出来る方。現在、加療中の病気の無い方。

身長165cm～175cm、BMI20～25の方。1週間、仕事または学校を休める方。

報酬・・・15万円（交通費全額支給。）

なるほど、確かに、バイトでは考えられないような額だ。結構いい仕事なんじゃないか。社会の為にもなる。

僕はそのページをお気に入りに追加して眠った。

・・・

部長「菅野君、調子はどうかね？何か相談があれば遠慮なく言うてくれ。」

部長はあの日以来、何かと気にしてくれている。今月いっぱい自主退職という形をとることになった僕は、自分の仕事の引継ぎやらで毎日、自分がこの会社を辞めるということを忘れそうなくらい忙しかった。

美樹「どうぞ。」美樹は乱暴にお茶を置いた。実は最近、美樹とは気まずい空気が流れていた。ゲンのバーに行った次の日、僕は美樹を飲みに行こうと誘った。告白するつもりだった。

僕が話しを切り出そうとしたとき、彼女が突然、森田課長と最近付き合いだしたことを打ち明けてきた。以前、ぼくは彼女に、森田課長のセクハラに困っていると悩みを相談されていた。なのになぜ・・・僕は彼女にキレた。リストラされたせいで、自分の事しか考えられなかった僕は、彼女を怒鳴りつけてしまった。

「あんなに嫌がってたじゃねーか！」

それ以来僕らはギクシャクしている。その気まずさを忘れるように、僕は仕事に明け暮れた。

そうこうしているうちに、退職前の最期の日になっていた。僕は前日の夜、彼女に謝罪の手紙を書いていた。本当は告白しようと思っていたこと、あれから何度も謝る機会を伺っていたが、切り出せなかったことを書き連ねた。

部長「今日でお別れだが、大丈夫か？転職先は決まったか？」

「いいえ、これからバイトをしながら探して行こうと考えています。」

部長「そうか。どこか紹介できるところがあれば力になれたんだが、社会全体が今、良くない方向へ向かっているからな・・・。す

まない。」

「大丈夫です、しばらく生活するお金はあるので、ちょっと学生気分に戻ってきます。」僕は出来るだけ明るく答えた。ずっとお世話になってきた人への出来る限りの気遣いだった。

部長「わかった、元気だな。」

僕は会社を辞めた。美樹とは結局、話していない。今日は家に帰って何しよう。

社長「そう、あの子、無理してるのね……。」高木由美子は社長室からぼんやり空を眺めていた。

部長「ええ。でも、彼ならきつと自分で道を切り開いていくと思います。一応、今後も定期的に身辺調査は継続していくつもりです。会社が持ちこたえればですが……。」

社長「あの子のためにも頑張らないと……。」

・・・

僕は家に帰るとパソコンを開き、治験のサイトをぼんやり眺めていた。僕は、再就職できるのだろうか。前の職場で得たスキルとはなんだろうか。僕は他人から必要とされる事なんてあっただろうか。人生の中で僕を必要としてくれた人なんていただろうか。僕は今日、社会との繋がりを無くしてしまったんだ。仕事を失って改めて思う。仕事とは、お金を稼ぐだけが大切なのではない。自分と社会の接点をつくってくれているありがたい場所なのだ。今の僕は家にいる。

ただ息を吸い、ゴミをだす。次の総理大臣が誰だろうが、アメリカの大統領が誰になるうが、僕を助けてくれる人は誰もいない。

僕が死んでも悲しむ人は居ない。

「治験やろう・・・。」決意は固まった。僕は応募フォームに記入し、メールを送信した。

## 山男との出会い

誰もが理由があつて生まれてくる。天涯孤独の人でも、生んでくれた母親と種まきしてくれた父親がいるはずである。突然、意味もなく湧き出る蛆虫だって、八工のパパとママから生まれてくる。僕は親の顔を知らない。死んだ祖母は僕が生まれてすぐに死んだと言っていた。僕は子供ながら、その話をすると辛そうな顔をする祖母を気遣い、その話はしないようにしてきた。

その日、僕は、山手線で大崎に向かつていた。治験のための面接という名の身体検査に向かうためだ。

電車の中でぼんやり会社のことを考えていた。僕は入社した当時、職場にあまり馴染めずにいた。原因は森田課長だ。僕をことあるごとに揖斐ってくるのだった。さらに腹立たしいのは、彼はK O O L というタバコを吸っていたのだが、「K O O L ってK i s s O n l y O n e L a d y って意味なんだぜ。」と、毎回同じうんちくを女子社員の前で披露し、無理やり接吻しようとするのだった。それだけでも万死に値するのだが、こともあるうことが、僕の片思いの美樹にまで同じことをしたのであった。

だがそんな、人としての価値は限りなく0に近い彼でも、僕より仕事が出来て、僕をいびってくるのだった。そんなこんなで僕は軽い鬱になっていた。

そんなときに、人事の高橋部長が相談に乗ってくれたり、「菅野は絶対これから結果が出る。森田、もう少し長い目で見てやってくれ。」と、僕をかばってくれたりした。僕は、僕の事を助けてくれた人の為に、何が何でも結果が欲しくなった。すると、不思議なことに、成績も伸びて、同期では一目置かれる存在になり、森田課長の嫌がらせも無くなった。

僕は、就職活動が上手くいかなかったほうだった。受けた所はすべて落ちた。もう駄目か、と思ったとき、僕のとっていたゼミの担当講師から、「うちのゼミから、一人人材を欲しがっている変わった企業があるんだがどうする？」と言われ、その話にとびつき、内定をもらった。その企業はアパレル業界ではかなり名の通っている企業で、なぜそんなところから？と疑問をもったが、職場はお洒落で、いつしかその企業の一員として働いている自分に誇りを持つようになった。

大崎駅に着き、歩いて15分ほどの病院へむかった。歩きながら思った。僕は、仕事を探したくない。働きたくないわけじゃない。できれば社会と繋がっていたい。こんな、自分の命を金に変えるような汚いことはしたくない。だが、仕事を探す気にはなれない。怖いのだ。また切り捨てられるのが。そんなことを考えているうちに病院に着いた。

受付の女性に治験のことで来たことを告げると、6階の会議室のような所に通された。真っ白な壁に、長机が4つ。その上にはペットボトルのお茶が置いてあった。僕の他には、学生であろう男性が10人、髭面の山男のような奴、ヤクザ風の男、などの、様々の人種が来た。周りの人間は僕を見て、どんな印象を持つだろう。差し詰め、リストラされ、就職浪人しているさえない男とでも思われているのだろう。

担当者が来るのを待っていると、山男が話しかけてきた。

「あんた、初めて？」山男は大柄な体格にいかつい髭なので、どんな恐ろしい男かと思ったが、近くで見るとなかなか人懐っこい眼をしている。

「はい、初めてです。」僕は聞かれたことに素直に答えた。

「そうか……。このバイト、すげー暇だからさ、話し相手居ないと頭おかしくなっちゃうんだぜ。俺は額田ってんだ。よろしくな。」

「彼はニコニコしながら握手をしてきた。なんだか同じ日本人とは思えない、外人と話しているような気がした。」

担当者が来て、薬の簡単な説明をされ、記入用紙に今まで病気がかかった既往などを書き、医者に聴診器などを当てられた。尿検査や採血などが終わり、同意書と諸注意の書いてある紙を渡された。

「今日の結果はメールで通知します。そのとき、次回の集合時間持ち物も発表します。それでは今日はご苦労様でした。」担当者はそれだけ言うとすぐ部屋から出て行った。

僕が帰ろうとすると、額田が話しかけてきた。

「せっかくだし駅まで一緒に帰ろうぜ」見かけによらず、中学生みたいな奴だ、と僕は思った。

帰り道、額田は、治験の体験談を話してくれた。起床、消灯がはやく、起こされると採血から始まり、小便のたびに紙コップに入れ、何cc出たか申告する。メシは不味く少ないなど、聞いているだけで嫌になった。

僕が東京駅で乗り換えようとしたときに、額田は突然、

「今日、どうせ暇なんだろう？飲みに行こうぜ。ここで会ったのも何かの縁だ。店はお前さんの好きな店でいいぜ。」と言い出した。

僕は、今日会ったばかりの、素性の知れない男と飲むなんて、不安でならなかった。会話は持つのだろうか。大体どんな話をすればいいんだ。しかし、上手く断ることもできず、結局、僕は額田をGの酒場に連れて行くことになった。ゲンなら、客商売だし、どんなタイプの人間とも上手く話してくれる。僕が会話に詰まってもどうにかしてくれそうだ。

読みは当たった。それどころか、額田とゲンは意気投合して、会話は盛り上がった。話して解ったのだが、実は額田は、フリーのジ

ヤーナリストで、色々な人生経験を踏んでいて、色々な事件の裏話などをジョークを交えながら話してくれた。

こうして僕らは朝までビールを飲みながら盛り上がった。

「じゃあ、治験の日にまた会おうな。」額田はフラフラの足取りで、小岩の朝もやの中に消えていった。

「あいつ最高だな。今日は連れて来てくれてありがとうな。」ゲンは僕に礼を言った。感謝してるのはむしろ僕の方なのに。

「治験終わったらまた額田さんと飲みに来るよ。」僕はゲンに手を振り、家に帰った。

...

翌日、パソコンのメールを見ると、治験の担当者からメールが来ていた。

『治験への登録ありがとうございます。それでは11月 日、朝9時に集合ですのでよろしくお願いいたします。』

持ち物・・・寝巻き、下着1週間分、歯ブラシ、髭剃り、湯飲み、外出は基本できませんので、必要と思われるものはあらかじめ用意下さい。それでは当日お待ちしております。』

しばらくすると、額田から携帯電話にメールが来た。どうやら彼も参加が認められたようだ。

僕は適当に額田にメールを返信すると、治験の間、暇つぶしのための本を買いに、神保町まで出かけることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3753f/>

---

灰色の空

2010年12月3日05時53分発行